

# 第4回 DTM 講座

## コード進行

### 1、コード進行とは

コードについては把握できたでしょうか？

コード進行とは曲の流れを構成する大事な部分であり、そのコード進行を記したコード譜面と呼ばれるものは、小節ごとにコードが配置するように書かれている。

基本的に、小節ごとに1, 2個のコードが記されている。

次のコードが来るまでそのコードを演奏し続ける事によって、曲の流れが出来上がる。

### 2、音階（スケール）とは

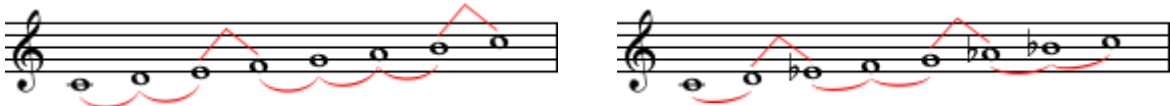
コード進行を知るためには、まず音階（スケール）を身に付けなくてはならない。

音階とは、ある音を基準として音を1音ずつ上げていき、1オクターブ上の同じ音が出るまでの8音の道筋を言う。

この時、基準にした音を「主音（トニック）」という。

音階は全部で7種類あるが、主に使われるのは2つのみ。

1つは「長音階」、もう1つは「短音階」という。「長調」「短調」と言ったりもする。



左が長音階。右が短音階。

長音階は「明るい」感じに聞こえ、短音階は「暗い」感じに聞こえるのが特徴。

#### ・長音階の構成音

「ド」の音を主音としてピアノの白鍵のみを通り、1オクターブ上の「ド」が来るまでの道筋。音の隔たりは最初の音から順に

「長2度」「長2度」「短2度」「長2度」「長2度」「長2度」「短2度」となっている。

この隔たりの順番を覚えれば、基準の音が「ド」でなくても音階を容易に構成する事が出来る。

#### ・短音階の構成音

「ラ」の音を主音としてピアノの白鍵のみを通り、1オクターブ上の「ラ」が来るまでの道筋。音の隔たりは最初の音から順に

「長2度」「短2度」「長2度」「長2度」「短2度」「長2度」「長2度」となっている。

この隔たりの順番を覚えれば、基準の音が「ラ」でなくても音階を容易に構成する事が出来る。

### 3、音階の名称決定

音階の名称は、主に日本語・英語・ドイツ語が用いられる。

#### ★日本語

|     | ド   | レ   | ミ   | ファ  | ソ   | ラ   | シ   |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 長音階 | ハ長調 | ニ長調 | ホ長調 | ヘ長調 | ト長調 | イ長調 | ロ長調 |
| 短音階 | ハ短調 | ニ短調 | ホ短調 | ヘ短調 | ト単調 | イ短調 | ロ短調 |

#の音を主音にする場合、#にする音に「嬰（えい）」の文字を付加する。

♭の音を主音にする場合、♭にする音に「変（へん）」の文字を付加する。

例) 主音がレ♭の長音階の場合…「変ニ長調」、主音がソ#の短音階の場合…「嬰ト単調」

#### ★英語

|     | ド       | レ       | ミ       | ファ      | ソ       | ラ       | シ       |
|-----|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 長音階 | C major | D major | E major | F major | G major | A major | B major |
| 短音階 | C minor | D minor | E minor | F minor | G minor | A minor | B minor |

#の音を主音にする場合、#にする音に「# (sharp)」の文字を付加する。

♭の音を主音にする場合、♭にする音に「♭ (flat)」の文字を付加する。

例) 主音がレ♭の長音階…「D flat major」、主音がソ#の短音階の場合…「G sharp minor」

#### ★ドイツ語

|     | ド      | レ      | ミ      | ファ     | ソ      | ラ      | シ      |
|-----|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 長音階 | C-dur  | D-dur  | E-dur  | F-dur  | G-dur  | A-dur  | H-dur  |
| 短音階 | c-moll | d-moll | e-moll | f-moll | g-moll | a-moll | h-moll |

※発音注意：C「ツェー」、D「デー」、E「エー」、F「エフ」、G「ゲー」、A「アー」、H「ハー」

#の音を主音にする場合、#にする音に「is」の文字を付加する。

♭の音を主音にする場合、♭にする音に「es」文字を付加する。

例) 主音がレ♭の長音階…「Des-dur」、主音がソ#の短音階の場合…「gis-moll」

例外として表記の異なるものが存在する。

・EとAの「es」のみ「e」の表記はない。 → Es-dur、As-dur、es-moll、as-moll

・Hの「es」のみ、「Hes」と書かずに「B」となる。発音は「ベー」 → B-dur、b-moll

簡単に表す事の出来ない音階は、簡単に表せるものを使って表記するため、存在しない表記が存在する。 → Dis-dur、Gis-dur、Ais-dur、des-moll、ges-moll

#### 4、コード進行全体における構成音

曲は本来、1つの音階で演奏されている。

音の種類は「ド」「ド#」「レ」「レ#」「ミ」「ファ」「ファ#」「ソ」「ソ#」「ラ」「ラ#」「シ」の12音存在するが、曲を演奏した時に使用する音は、基本的に音階で使用する7音のみという事である。自分の演奏している音階がどのタイプの音階なのかを把握して、それに合った音の選び方が重要になる。

例)「ト長調、G major、G-dur」で曲が演奏する場合、曲中に使用している音は

「ソ」「ラ」「シ」「ド」「レ」「ミ」「ファ#」の7つということになる。

それ以外の音が使えないわけではないが、使いどころを間違えると不協和音にしかならない。

この7つ以外の音を使う時は、それに合わせて他のパートも音を変えるようにしよう。

「レ#」の音を使いたい場合、他のトラックで「レ」の音を使わないようにする。

音を変化させたのなら、その小節中は変化前の音を使わないようにする必要がある。

#### 5、コードの選び方

音階が決定したのなら、その曲の演奏中は音階によって定められた7つの音を使って演奏しなくてはならない。

ならば、コードに関しても使って良い音と使うと不協和音になる音が存在することになる。

上記同様、「ト長調、G major、G-dur」を例に見てみよう。

構成音は「ソ」「ラ」「シ」「ド」「レ」「ミ」「ファ#」の7つ。

まずは基本三和音、「G」と「Gm」。

「G」の構成音は「ソ」「シ」「レ」、**「Gm」**の構成音は「ソ」「シ**♭**」「レ」

「G」の構成音は「ト長調」の構成音にすべて含まれているので、使用しても何の問題もない。

しかし、「シ**♭**」の音は「ト長調」の構成音に含まれていないため、「Gm」を演奏中に使用すると不協和音になってしまう。

次にセブンスコード、「GM7」「GmM7」「G7」「Gm7」。

「GM7」 … 「ソ」「シ」「レ」「ファ#」 … 仕様可能

「GmM7」 … 「ソ」「シ**♭**」「レ」「ファ#」 … 「シ**♭**」で不協和音。

「G7」 … 「ソ」「シ」「レ」「ファ」 … 「ファ」で不協和音。

「Gm7」 … 「ソ」「シ**♭**」「レ」「ファ」 … 「シ**♭**」と「ファ#」で不協和音。

同様に「ディミニッシュコード」や「オーギュメントコード」、「サスフォーコード」などについても検討してみるとよい。

「G」以外の音は使えないのかというと、そうではない。勿論別のルート音のコードも「ト長調」と同じ構成音を使っていれば、その曲の演奏中は使っても問題なく聞こえるはずだ。

「A」がルート音なら、「Am」「Am7」など。

「B」がルート音なら、「Bm」「Bm7」など。

「C」がルート音なら、「C」「CM7」など。

「D」がルート音なら、「D」「D7」など。

「E」がルート音なら、「Em」「Em7」など。

「F#」がルート音なら、「F#m7-5 (エフ・アルタード・マイナー・セブソ)」(「ファ#」「ラ」「ド」「ミ」)のみ。

「G#」「A#」「C#」「D#」「F」はルート音が構成音から外れている。

お分かり頂けたらどうか。

構成音さえ分かれば、どのコードを使えばいいのかすぐに分かるようになる。

そしてコードの並べ方は個人の自由。構成音さえ合っていれば、どんなコードを並べようと不協和音には聞こえなくなるはずだ。

更にもう1つ。曲の音階を「ト長調」で構成した場合、「G」のコードで終わりにすると、かなり安定した曲に仕上げることが出来る。

即ち、トニックコードで終わらせると安定するという事だ。

## 6、循環コード

コード進行は自由に並べて良いものだが、自由気ままに並べてしまっただけでは曲の流れが不安定になる。歌を歌う時に息継ぎが必要なのに同じように、曲の流れの中でも息継ぎをするタイミングを作ると、安心して曲を聴く事が出来る。

その息継ぎの部分を作るために用いられるのが「循環コード」である。

「C」→「D」→「Bm7」→「Em」というように、あるコードの流れを作り、それを繰り返して演奏することで循環コードが完成する。

循環コードは大抵、2周期・4周期・8周期で繰り返される。

例) 2周期…「G」→「D」→「G」→「D」→「G」→「D」→…

4周期…「C」→「D」→「Bm7」→「Em」→「C」→「D」→…

8周期…「G」→「D」→「Em」→「Bm」→「C」→「G」→「C」→「D7」→…

循環コードの良いところは安定して聞ける場所だが、ずっと同じ循環コードを使用すると代わり映えがなくなってしまう。

その欠点を補うには、循環コードに時折変化を与えてやる必要がある。

この変化こそ、構成音にない音を使用する絶好の機会とも言える。

例) 「C」→「D」→「Bm7」→「Em」→ 「C」→「D」→「Bm7」→「Em」→

→「C」→「D」→「B7」→「Em」→ 「C」→「D」→「G」

など。